



妙たえの光ひかり

復刊126号

ステージ4のがん、でも前向きに

新潟市西区

小林信子さん(78歳)

信子さんは日頃から健康で、若い頃は自宅で美容院を営むなど明るく社交的な人柄です。いつも親族や友人に囲まれて賑やかな日々を過ごしていました。夫を55歳でがんにより亡くしたこともあり、自身も70歳から毎年検診を受け健康上の心配はありませんでした。

ところが去年12月の深夜、トイレの中が赤く染まるほどの血尿が出ました。驚いて受診したのですが「異常はない」と言われてしまいました。納得できず専門病院での内視鏡検査を希望し、モニター画像に写った自身の膀胱を見て「先生そこに血液が滲んでいます」と思わず声を上げました。組織検査の結果ステージ3の膀胱がんと診断されたのです。

転移の可能性が高いため、まずは抗がん剤を3ヶ月間投与。そして6月に膀胱の全摘出手術をしてストーマ(人工肛門)を装着する生活になりました。しかし肺などへの転移が見つかり一番重いステージ4と診断されました。「これ以上の手術はできない。完治の見込みもない」との医師の言葉に、付き添ってくれた姪と抱き合っただけ泣きそうでした。進行を抑える効果が3割程度という、免疫療法で臨むことになりました。(2ページに続く)



行事案内



月忌納め(お札配り)

12月中に地元の檀徒宅へ、来年のお札を持ってお経に伺います。県外の方でお札を希望される方にはお送りします。

除夜の鐘・お焚き上げ

12月31日(日)

午後10時30分から、本堂で除夜法要。11時45分ごろから除夜の鐘、古いお札、しめ縄等の「お焚き上げ」があります。除夜の鐘はどなたでも撞いていただけますが、先に大玄閣受付で整理券を配布します。ご家族そろってお参り下さい。※お焚き上げの古いお札等、当日お持ちになれない方は、事前に祖師堂の受付箱にお入れください。



年始参り

1月1日(月)、2日(火)

午前9時～午後4時。玄関での受付後、住職が大広間でお待ちしています。令和6年に年回忌を迎えるお宅は、法事の申込みをお受けします。飲食は昨年同様自粛させていただきますが、元旦のお茶席は実施の予定です。お参りの人数制限はありません。ご家族そろっておいでください。



『星祭り』祈願札

人には個々にその年の星回りがあります。新年の星回りが安泰でありますようにと祈願するのが『星祭り』です。ご希望の方にはご家庭で1枚のお札にして1軒2千円でお届けしています。新規お申し込みの方は、別紙申込書にご家族の氏名、性別、生年月日を書いてお知らせ下さい。継続の方は申込不要ですが、慶弔等でご家族に変更があった場合はお知らせください。新規、変更ともに12月20日までにお願致します。

厄除け祈願祭

2月3日(土)、4日(日) ※両日とも9時半から

厄年の早見表は別紙チラシにあります。厄年以外の方でも「家内安全」「合格祈願」等お受けいたします。同封の返信用ハガキにてお申込みください。



月例ボランティア 毎月15日

1、2月の信行会とボランティアはお休みで、3月から再開の予定です。

3月6日(土)「信行会」、3月15日(金)「ボランティア」です。



あとがき

「浄土講座」での櫻井上人・西出記者対談の抄録をインタビューページに載せました。櫻井上人の道場体験は前号でもインタビューしております。また「妙の光アンケート」へのご協力ありがとうございました。お返事は、今後の編集に生かしていきたいと存じます。皆さんからご希望が多かった小川なぎささんの「寺庭から、を、今後(毎号とはいきませんが)再掲していくことに致しました。なぎささんとの再会を、お楽しみください。(新倉理恵子)

新潟市西区 小林信子さん

大家族の中で育つ

信子さんは10人兄弟の末っ子で、さらに離婚して戻った伯母とその娘2人も加わり、いつも賑やかな家庭で育ちました。両親は農業収入だけでは足りず、父が電気工事の仕事に従事しました。その父が37歳のとき高圧線に触れ、奇跡的に一命はとりとめたものの、右手の指全てと左手の肘から下を切断したので、昭和初期とはいえ、麻酔無しでノコギリでの切断だったそうです。以来父は右手に括りつけたフォークで食事をし、両腕でコップを抱えて晩酌、握れないブレーキを足元



亡くなった姉の写真で話が盛り上がる

に加工して自転車にも乗りました。工夫しながら苦勞して家族の生活を支えた両親でしたが、晩年には多くの子どもたちに囲まれて幸せでした。

結婚した長男が子どもに恵まれなかった時期、家の継承に不安を持ったのか父の意向で末っ子の信子さんが長男の養子になりました。やがて信子さんがお婿さんを迎えて、家の跡を継ぎました。婿の昇さんは妙光寺の世話人を勤め、信子さんの兄は分家してその長男が現在の世話人を引継ぐなど、兄妹親戚皆さん近隣に暮らして和やかに交流する日々を過ごしています。

周囲の優しさが一番の支え

その穏やかな日々を突然に襲った信子さんの病ですが、その日常に大きな変化はないと言います。同居する長男と次男夫婦にその娘の5人で暮らし、勤めで帰りの遅いお嫁さんに代りこれまで通り信子さんが家族の夕食を作ります。

日々の買い物や病院には姉の娘である姪が付き添ってくれます。2ヶ月を経てやっと慣れてきたストーマの取り外しも、この姪が手

伝ってくれます。気分が落ち込んだときランチに出かけたり、帰りにお店で洋服を見たりするのも、姪や昔からの近所のお友達が付き合ってくれます。

4日に1回来てくれる訪問看護師の人たちが本心に優しく救われると言います。「血圧が少し高めだけど心配ありませんよ」という言葉掛けもとても安心につながるのよ」「新しく始めた免疫療法の効果に分るのはもう少し先だけだよ」と言ってくれるし、長男は好きだから食事を少し低く下して来た感じがするの。そしたらお嫁さんがこれからは夕食作りも分担するからと言ってくれるし、長男は好きだから金を使ってやりたいことやれって言ってくれるんです。周囲の優しさが何よりも元気の素だわ」と笑顔で語ります。

前向きに生きる

「院首さんねえ、私具合が悪くなる少し前にお仏壇お参りしていて数珠を繋いでいる糸が切れたんですよ。そのときフツと悪いことの前兆かなって思ったんだけど。」「そんなことないよ。一所懸命お参りして毎日数珠を使ってきたからくたび

れた糸が切れたんでしょ」と院首が応えると「そうだね、母親から貰った数珠だったんですよ。思いついてお嫁さんに高価な新しい数珠を買って上げて、それでこの数珠も繋ぎ直してもらいました。」

「お婆ちゃん！楽しい事を考えていれば気持ちも楽になるんだよ」とつて小学1年の孫娘が言うんです。確かにひとりでも考え込むと駄目。昼は忙しく動いたり人とおしゃべりして、夜は大好きな韓国ドラマにどっぷりはまってぐっすり寝る。かかった病気は仕方ない。前向きに生きるしかないってね。」「実は2年前にがん保険を追加して、おかげで今回保険金が多く出たんです。それなのに高い治療費も下がって来ていますし、私ってなんて運がいいんだろうって思いましたよ。」

「夫が亡くなる前この『妙の光』に抗がん剤の副作用が辛いつて闘病記を書いたでしょ。私も書こうかなって思っていたところなんです。気持ち前向きに持ち続ける大切さを伝えて少しでも人のお役に立てれば、ってね。」信子さんは、いつもの大きな声で話してくれました。

(院首記)

安 穏

小川良恵

ご縁に導かれ 県内3カ寺団体参拝



妙法寺本堂でのお参り(石丸寛さん撮影)

イノシシを目撃

新潟市内でイノシシの目撃情報が相次いでいます。妙光寺檀徒さんの畑も今年は大きな被害にあっています。妙光寺境内でも足跡が多数残されていたりしますが、実は私も11月13日、日帰りの東京出張を終えて21時過ぎに帰宅したとき、イノシシの群れを目撃しました。暗い中でしたが5頭はいたようです。その時は「怖い」と思いましたが、ある友人から「ちょうど亥の月亥の日の亥の刻で縁起が良いね」と言われ、なるほど！と感心してしまいました。畑の被害は困ったものですが、猪は昔から無病息災・子孫繁栄・魔除けの象徴として親しまれる一面もあるそうです。

「縁起」

さて「縁起」は、こうした何かしらの吉凶の前触れという意味で使われることが多いのですが、元々は全てのものごととは他の関係が縁となって起こることを意味する仏教用語でした。転じて、お寺が創建された由来や沿革という意味もあります。11月12日、妙光寺とご縁の深い県内3カ寺の参拝旅行に行つて参りました。ありがたいことに、25人の定員が満席となり、初め

て参加の方も多く、賑やかなバス車内となりました。

長岡市村田妙法寺から法華寺へ

まず日蓮宗の本山村田妙法寺様にお参りしました。貫首様(本山の住職)が入院中とのことで、参道の案内を檀徒の方がしてくださいました。歩けば5分の道のりを30分かけて丁寧に説明していただき、ことに長岡火花を模した山の斜面に植えた桜は見事なものだとうかがい、「春に来たいね」と盛り上がりました。早春の頃は雪割草が咲いて、県内外から多くの方が訪れるそうです。本堂では塔頭寺院のご住職から読経していただき、全員で団扇太鼓を叩きながらお題目をお唱えしました。

次に鎌田上人が住職を務める法華寺様にお参りいたしました。「ずっと行きたいと思っていたが機会がなかった」と楽しみにしている参加者も多いためです。長岡駅の傍にあり檀徒1000件程の小規模なところと鎌田上人は話しておられましたが、とても居心地よく整えられ皆さんの顔もほっとほころぶお寺でした。昼食もご供養いただき、ことに寺庭婦人の久実子さんが振舞ってくださった野菜たっぷり

の豚汁は、冷えた身体に染み込む美味しさで、私はお代わりをしてしまいました。(野菜は妙光寺の檀徒さんからいただいたものというのも、また温かいお気遣いを感じました)

そして、

法華宗総本山本成寺に参拝

最後のお参りは前号の『妙の光』でもご紹介した、法華宗総本山の三条本成寺様です。広い堂内を隅々までご案内いただきました。さらに妙光寺非常勤職員の遠山上人にご尽力いただき、普段は入ることのできない内陣で読経させていただきました。また貫首様にご挨拶もさせていただきました。皆さんにとっても貴重な経験となりました。

雨も降らず、心温まる団体参拝に

全てのお寺様で暖かいおもてなしをしていただき、感謝を重ねる団参となりました。天気予報は雨でしたが、本成寺様からバスが出るときに本格的に降り始め、ほとんど傘も使いませんでした。妙光寺に戻ると午後からずっと雨だったと聞きましたので、お参りのあいだ、仏様が雨を避けてくださったのでしよう。ありがたいことです。

日帰り団体参拝の旅 11月12日

秋の一日、県内の本山村妙法寺、長岡市法華寺、法華宗総本山三条本成寺に、中型バス満席の25名で参拝しました。好評につきまた計画します。



妙法寺で記念撮影



法華寺住職は院首の弟子の鎌田上人。心のこもった昼食をいただきました



本成寺の本堂は総ケヤキ造りで荘厳です



妙法寺の参道を行く一行

布教研修生の来訪 11月14日

日蓮宗布教研修所は、応募者から選考された若い僧侶が6カ月間、日蓮宗や仏教をより深く学び社会に広める研修をする機関として、千葉県の本土寺に開設されています。今年度の研修生と指導員計9名が、外部研修で妙光寺に参拝されました。



永代供養墓のモデルと言われる安穩廟の見学



研修所の先輩に当たる良恵住職と、院首が妙光寺の運営を解説しました

第11回浄土講座 11月26日

秋も深まった日の午後、新潟市・砂丘館と妙光寺の共催、新潟フランス協会の協力でフランス文学者巖谷國士さん(明治学院大学名誉教授)の『人間にとっての庭園とは何か』の講演。熱心なファンもおられて65名近い参加でした。



妙光寺の七五三詣り 11月19日

毎年少ないながらも希望者が絶えないお寺の七五三詣り。健やかな成長を願いご祈りました。



寺のうごき



本堂での法要



墓地に向かう

◆秋のお彼岸 9月23日

暑かった夏も過ぎ、穏やかなお天気のお彼岸の一日でした。コロナも落ち着き久しぶりに住職の法話もありました。



墓地での合同供養

◆お会式と第10回浄土講座 10月22日

「お会式」と呼ぶ日蓮聖人ご命日の法要に合わせて、生前戒名(法号)を差し上げる法号授与式、午後からは第10回浄土講座を催しました。浄土講座の内容はインタビューのページに要約を掲載しています。



法号と記念品を授与



京住院では恒例の中野巨陶展も開催されました



日蓮聖人像を安置する祖師堂で法要



当番手作りのおときは毎年喜ばれます



大広間での浄土講座は、易しい語りで和やかでした

誰でもなれるお坊さん 櫻井義秀上人×西出勇志さん

10月22日(日)午前中、妙光寺では
お会式法要と第21回法号授与式を行いました。
おとききを頂いた後、午後1時半からは
「第10回浄土講座」として、
櫻井上人と西出記者の対談をみんなが聞きまし
抄録をお読みください。



櫻井義秀上人
1961年山形県生まれ。北海道大学大学院教授。専門は宗教社会学。一昨年妙光寺で得度し、大学で教鞭をとりながら資格試験等を経て、今年5月身延山での信行道場の修行を終え日蓮宗僧侶となった。統一教会研究の第一人者として、数多くのマスコミに登場している



西出勇志さん
1961年京都生まれ。共同通信編集委員。30年にわたって宗教の取材を続け、現在編集委員兼論説委員。全日本仏教会広報委員も務めている。

西出 私は取材を通じて櫻井先生とは長いおつきあいです。いつもは背広姿の先生が今日は法衣姿なのは新鮮です。法衣はいかがですか？

櫻井 和服を着るのは大変で、たたむのも大変です。でもこれができないとお坊さんではできない。信行道場では1分でもためと言われて、無理だと思っても、できないとは言えません。でもそういう読経も含めた所作を身につけることが仏教かなと、今は思っています。「信じる」が強調されますが、「やってみる」のが宗教なのかもしれません。

西出 外から仏教界を見てこられて、ど

の段階で出家を考えたのですか？

櫻井 出家は決断してするものだと考えられていますが、私は意図して今こうしているのではなく、いわば「法縁を得た」のです。父の看取りと葬儀を経験する中で、もつと学びたいという気持ちになつて院首様に手紙を書き、そのまま妙光寺で得度することになってしまいました。そして度牒を受け、「皆の前でやるというたからやるしかない」ということで信行道場も終えて2年弱で僧侶になったわけです。

西出 私は櫻井先生の得度を『妙の光』で知りまして、ちょうど私の知っている櫻井だった。でも今はもつと自由に考えても良いと思っています。私たちはいろいろなことに縛られて生きています。ただ宗教によつてはばらけているものから抜け出て、自由になる側面があるのではないかとと思うようになりました。ところが現代の仏教は「教え」とか「これを拜まなくてはいけない」とかいうことにこだわって、小さくなっています。もつと自由になるべきなのではないかと思えます。

西出 カルト問題の第一人者として、今回の統一教会の解散命令請求はどのような評価しておられますか？

櫻井 たとえ解散命令が認められたとしても、統一教会の問題は解決しません。宗教法人はなくなりますが、団体はなくせない。統一教会は宗教法人本体以外にも百以上の団体があり、会社もいっぱい持っています。簡単に組織力は低下しない。そして彼らは反省することもない。なぜなら自分たちは正しくて他はサタンだと思っているからです。批判する櫻井は大サタンです。批判する側に影響されると「地獄」に落ちると信じています。統一教会の悪いところはここです。他は皆サタンで、文鮮明はキリストだ。何故そういえるのかというと「私がそう思うから」で終了です。絶対に突き詰めて考えない。突き詰めること自体が罪なんです。これに日本人は乗りやすい。「信じる」ことが宗

井先生と結びつかなくて「え!! どういうこと?」と思つて取材しようと連絡したら「待つて、正式に僧侶になつてから」と言われました。それで今日ようやくお話を聞いているわけです。

櫻井 信行道場の同期は40人余いましたが、私のように在家——寺の生まれではない人はわずか5、6人でした。たまたま父の死や60歳手前だったこと、今まで宗教の中の様々な人を見てきたことなどが化学反応を起こして「もう少し進んでみようか」とこの道に入ったという感じです。しかもたまたまコロナ禍でした。人と会つて調査をしたいのに、人

教」という考え方は間違っています。「自分で考えて納得して進んでいくのが宗教」なのです。統一教会は高額献金を集めるからいけないというだけではない。心の使い方が間違っているということを見なくてはいけません。

西出 私は普通の宗教とカルトは地続きのものだと考えています。先生は日本の仏教界をどう改善すべきだと思いますか？

櫻井 統一教会はおかしいとストレートに言う人がいませんね。現実に統一教会の信者は幸せになっていない。本人も家族も、幸せになっていないんです。ところが何故信者がそういう心になつているのか、というところの突き詰めがない。仏教界はもつと具体的に批判すべきです。「カルトだから駄目だ」というだけではいけない。どこがどうだめか、ということを考えなくてはいけないんだけれど考えない。それは、宗派仏教が信仰や教化の目標を、祖師や師匠、教団の教えに素直に従う「ころ」の訓育に偏つてしまった弊害のようにも思われます。信行道場も下手をすれば統一教会のセミナーのようになります。身体を限界まで追いこまれて、思考力が低下するため決められたことだけやって35日間をやり過ごすだけになる。発心する経験やしつかりした教学への理解なしに僧侶になり、教える側に立つのは恐ろしいことです。

と会うことができない。そんな時に、院首様に手紙を書いたら「すぐ来なさい」と言われて会えた。ご縁があったと思えました。

西出 道場では最年長だったそうですね。

櫻井 35日間の修行は、62歳の身には大変キツイものでした。3時半起床で、4時から水行。それから読経と儀式の練習の日課をしていくのですが、辛かったのは食事を5分で済ませなくてはいけないことでした。口に入れると同時に何かをつかまないと間に合わない。入浴も10分間で、睡眠時間は5時間ほど。完

西出 日本の仏教者に「統一教会をどう思いますか?」と聞くと「カルトだしね。うちの教団とは違う」とか、とにかく関わりたくないし関わる気がないという人が多くて、私はそれが不満でした。宗教で悩んでいる人がこんなにいるのに宗教者として何も言うことがないんですか!と、仏教者が集まるさまざまな席で言いました。解散命令請求が出たというのは大変なことです。日本人の心の問題が関わる大事件なのに、宗教界は何か他人事のように感じていると思えますね。

櫻井 私はもうすぐ定年ですが「僧侶」という教師資格を手に入れました。これからは今日のように宗教や仏教のお話をして、自分の願いを世の中や宗教界に届けることもしていきたいと思えます。

西出 櫻井先生のような在家出身僧侶の存在は大切です。私はある雑誌に「在家出身者と副住職が今後の仏教界を変えていくパワーになる」と書いたことがあります。住職は忙しいですから、副住職が様々なことに取り組むのがいい。もちろん住職一族——一族も大切なのですが、在家出身者は発心がありますから、その熱量が日本の仏教界を変えていくということはあるのではないのでしょうか。今後の先生のご活躍に期待しております。

(編集・新倉理恵子)



全に睡眠不足で本当に辛かったです。しかも怒鳴られるんです。「遅い!」「何やってる!」叱咤される方は20代のお兄ちゃんです。とんでもない所に来たと思いましたが「大丈夫ですか?」とか聞かれます。まあ要するに「ここは厳しくやるしかないで、他意はないんですよ」と言いたいんですね。自由時間はなく、やれと言われたことだけやって、やらないと怒られる。こういう生活をしたのは初めてだったので、本当に大変でした。ただこれは楽といえは楽なんです。頭を空っぽにして変に思いを巡らす必要はないのですから。「今、ここ」に集中するわけです。

西出 得度されたと知った時、共通の知り合いのみなさんは一様に驚かれています。
櫻井 研究者として、私は今まで宗教に手厳しく言ってきた方でした。カルト研究などもして、宗教には否定的な感



新年お茶席(妙光寺お茶クラブ)



Q お寺では、お正月に何か特別なことをしますか？

門松やお節料理は…

門松などの飾りやおせち料理など、お正月の風習は元々、「歳神」をお迎えするためのものでした。「歳神」とは新年を司り、訪れた家に一年間の多幸や豊作を授けてくれる神様です。須佐之男命すさのおのみことのことという説もありますが、様々な民間信仰が習合した存在で、田の神や先祖が同一となった御霊として信仰される地域もあります。

歳神を迎えた後で初詣へ

やがて時代が変わると、家に「歳神」をお迎えした後で、氏神を祀る地元の神社や、先祖を弔う菩提寺へ行き、旧年中の感謝を伝え新年の幸いを祈るようにもなりました。一般的には「初詣」をすることが多いかと思いますが、「初詣」は言葉としては比較的

新しいもののようで、交通網の発達により、遠方であっても著名な寺社仏閣へのお詣りする日として印象づけられたそうです。



妙光寺のお正月——清々しい年の初めを

妙光寺では、元旦と2日、本堂にお参りされる方をお迎えし、年始のご挨拶をしています。仏様にお参りしていただき、清々しい一年のはじまりをお迎えてください。不幸のあったお宅は、参拝をさけるものと言われることもありますが、仏教では死を不浄なこととはとらえていません。一周忌や三回忌など法事の申込み受付も行っていますので、気にせずにお参りください。

お釈迦様の教えを 全ての菩薩が弘める

ぞくろいほん
『嘱類品第二十二』

『嘱類品第二十二』は法華経の中でもとても短い章ですが、大切な章です。前章の『如来神力品第二十一』で、地涌の菩薩に対して行われた法華経宣布の付嘱——法華経を弘めることの委嘱が、ここで、全ての菩薩（法華経の教えを学んで悟りを求める修行者）に対してなされるためです。

私の智慧を全ての人に

お釈迦様はそれまで座って教えを説かれていた座から立ち上がり、無数の菩薩たちの頭を撫

でながら、「私が途方もなく長い年月をかけて得た悟りを、皆さんに委ねます。あなたたちは、一生懸命にこの教えを、生きとし生ける全てのものに弘めていきなさい」と仰います。何故なら、仏様は大いなる慈悲をもっており、誰も漏らすことなく仏教の智慧を与えることを望んでいるからです。人々が教えを聞いて喜ぶことが、何よりの恩返しであると聞いた菩薩たちは、歓喜しました。お釈迦様への尊敬の念を増して、伏して「全て仰せの通りにいたします」と誓いました。

分身の仏様は それぞれの宇宙へ

これを聞いたお釈迦様は、その場に集めていたご自身の分身の仏様たちを、それぞれの宇宙へと帰し、空中に浮かんでいた宝塔も元の場所に戻るよう命じられた——というところまでが、『嘱類品』のあらすじです。

見宝塔品第十一で宝塔が空に浮かんだことから始まった「虚空会こくうかい」（空中の世界）も、ここで終わりとなり、場面は再び地上りょうの霊鷲山じゆせんへと戻ります。

院首夫人・小川なぎささんは、2年8カ月の胃がん闘病の後、2020年10月15日行年61歳で亡くなりました。『妙の光』誌上には人気シリーズ「寺庭から」を連載し、その温かい人柄は多くの檀信徒に慕われてきました。この度実施したアンケートでも、「寺庭から」をまた読みたいという声が、たくさん寄せられました。そこで編集部では、30年余にわたる連載の中から、なぎささんの言葉を再掲しようと企画いたしました。今回は1991年10月復刊第3号から、31歳のなぎささんです。

寺庭から again

1991年10月復刊第3号

小川なぎさ



救いの手

今年は例年になく夏から秋にかけて多忙だった。もう3ヶ月も休日らしいのをとっていない。これはもうお寺の宿命というか、最近ではあきらめているのだけれど、疲れてくるとちょっと辛い。

お寺を住家にする人を「寺族(じぞく)」、その生活の場を「寺庭」という。初めは抵抗があったけれど、今は少し慣れた。「年中無休、24時間営業です」まるでやりのコンビニストアみたいだ。それを住職とその家族で(もっとも4人の子どもは役立たず)きりもりしているのだから大変だ。そして行事の前など、到底この人数では無理

と心配していると、不思議なことに、どこからか救いの手がのびるのである。その方々の手伝いで準備が整ってゆく。さて行事も無事終わり、住職とお茶なんぞ飲みながら「仏様のご加護だね」などと話し合う。私は口が裂けても言わないが、後には必ず「日頃の精進が良いからだ」と自分のことを言うのは住職である。

秋のお彼岸に初めて割前地区の姑さんに代わって若いお嫁さんがお手伝いに来てくださった。安穩でお馴染みの角田の若手の方々が続いて、こうやってお寺に若い人々が集まってくださるのは本当に心から嬉しい。ありがとうございました。

お寺での働きは本当の意味でのボランティアである。お寺に奉仕することは、仏様に奉仕することだ。私はそんな皆さんにつくづく頭がさがる。そしていろいろな事を学ばせていただく。またそんな熱心な人材をもつ妙光寺を誇りに思ったりする。行事の時、お寺の台所では、働きの人たちが心をこめて料理を作る。私はその方々に心の中で手をあわせてしまう。「寺庭、もまた良いのかもしれない。



角田山妙光寺インフォメーション



墓地の植栽延期

夏に増設工事が完成して移転いただいた墓地の植栽を、秋に予定していましたが、しかし風当たりが強い場所のため、植えただけの木が冬の強風に耐えられない可能性が強いとの業者の指摘で、来春に延期しました。ご了承ください。

任意後見の相談対応

認知症等の病気で本人の判断能力が著しく低下すると、法律上本人はもろく配偶者や子どもでもその資産に手を付けることが難しくなります。わかりやすく言えば、本人名義の口座からの入院費や施設費の支払いもできなくなるのです。

そのために「成年後見」という制度がありますが、今その運用を巡り様々な問題が起きています。自由に自分のお金を使えない、想像以上に費用がかかる、後見人にお金を使い込まれた、等々です。そのためにはあらかじめ信頼できる相手に契約で依頼する「任意後見」が良いのですが、依頼先がなかなか見つからないのが実情です。

囲炉裏小屋が完成

こうした身元保証を巡る問題が多発して、国も対策に動き出しました。妙光寺では以前より皆さんからのご相談がありますが、対応が困難でそのたびに信頼できる弁護士にお願いしています。去る12月3日に、NPO法人と協賛して講演とシンポジウムを開催したところ、1ヶ月前に予約で埋まるほど盛況でした。今後も引き続き「任意後見制度」を知るための、老いと死への安心情報を提供してまいります。

近年キャンプや薪を焚くといった火を囲む生活が人気です。以前は田舎ならこの家庭にも囲炉裏があつて、暖を取り煮炊きをする家族団らんの場になっていたことを思い出します。現在は集めた落ち葉で焚き火での焼き芋も禁止、境内で古い御札を燃やす、お焚き上げは、そのたびに消防署への届け出が必要です。

そこで行政の指導を受け、環境と安全に配慮した屋根付の囲炉裏小屋を出入り業者の協力で設置しました。境内で発した木を薪にして、周囲の林を眺めな



高台で境内が見渡せます

がら焚き火を囲んで寛げる場です。親子家族の団らんや、おひとりでもの思いにふけりたい方にもご利用いただけます。気軽にお問い合わせください。

手洗舎の給水不調

山門前参道脇にある手洗舎で、常時水を出せるようになったと前号でお知らせしました。山の沢水を引いたのですが、想像以上に泥が多く混入して給水管に付



境内いたる所で猪の掘り返した跡が

獣害対策

全国で熊の人的被害が報道されています。境内を含めた角田浜地区ではイノシシの出没と農業被害が多発しています。近頃はシカの目撃情報もあります。熊は今のところいません。

イノシシは境内とつながる角田山に相当数生息し、その数を増やしていると言われます。境内でも朝晩見かけたり、庭の土が掘り返された跡が多数残っています。直接遭遇すると危険なため、対策として柵で囲む案を業者と検討中ですが、景観と費用が課題です。